

温故創新「乃村工藝社 博覧会資料 COLLECTION」

～イベント資料による社会貢献の取組み～

○ 石川敦子（株乃村工藝社 情報資料室）

キーワード：社会貢献、データベース、公開と活用、新たな価値

1. 目的

明治 25 年創業の乃村工藝社は、創業者・乃村泰資が庶民の娯楽であった国技館でのイベント・菊人形の舞台で「十二段返し」など工夫をこらした演出が話題を呼び、戦前は新聞社などが日本各地で開催した博覧会や百貨店の催しの企画・展示・施工を数多く手がけた。戦後は経済成長と共に見本市・商業施設と事業内容を広げ、昭和 45 年「Expo' 70 日本万国博覧会」では、テーマ館をはじめとする 18 のパビリオンを受注するに至る。その後、国内で開催された「Expo' 75 沖縄海洋博覧会」「Expo' 85 国際科学技術博覧会」「Expo' 90 花と緑の博覧会」の他、1980 年代の地方博覧会ブームでも多数のパビリオンを手がけた。時代の最先端技術を展示し、数多くの入場者を記録する博覧会でも会期が終ると跡形もなく消えてしまう運命にある。堺市在住の寺下勅氏が日本で開催された博覧会の歴史を研究するために収集された資料約 10,000 点が 2001 年、乃村工藝社に寄贈された。歴史的にも民俗的にも価値がある資料の寄贈を受けたことで、社業の原点を見つめ、次なる飛躍に向けた社会貢献活動の一環と位置づけ、博覧会での体験が、記憶にしか残らないものを“カタチ”として体系的に整理保管、広く一般に公開し研究に供することを目的とする。

2. 方法

寄贈された約 10,000 点の博覧会資料を種類別に分類、年代順に保管する準備を進めると同時に、インターネットでの公開を視野にオリジナルデータベースの開発に取り組む。先ず寄贈者から提供された博覧会年表データ(名称・開催期間・開催地・主催者・入場者数など)をデータベースに登録し、その博覧会データのサブデータとして資料を 1 件ずつデジタルカメラで撮影した写真データと資料の文字データ(種類・棚番号・付帯情報など)に登録。2005 年にインターネット公開し、資料閲覧や博物館企画展への貸出などを受けている。会社としても年間予算を組み資料の充実を図ると共に、個人・団体からの寄贈も随時受け付け収集活動を継続、現在資料は約 15,000 点登録し、新たな活用方法を模索中である。



明治 4 年 京都博覧会



明治 5 年 文部省博覧会（湯島聖堂博覧会）

3. 結果

所蔵する資料は国内博覧会の通史という意味合いを持ち、国内・海外の研究者、博物館、出版社、放送局からの問い合わせや閲覧・博物館企画展での展示・出版物・TV番組に活用されている。データベースは国立国会図書館が行っている電子図書館事業のひとつであるインターネット上の各種データベースサイトを案内するDnaviにリンク収載された。そして、これらの活動を含めた情報資料室の業務を専門図書館協議会の冊子「専門図書館」やアートドキュメンテーション学会研究会（テーマ＝乃村工藝社大阪事業所の資料室について・博覧会コレクションを中心に）で紹介された。このように、閲覧者や活用事例の増加で幅広い人的ネットワークも形成されつつある。

4. 考察

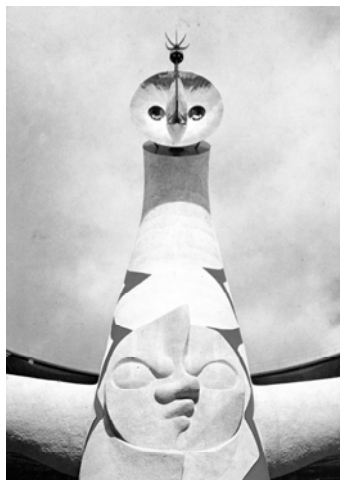
万国博覧会については、国内外を含め多くの研究者が論文や書籍を出版しているが、国内の博覧会については研究対象として認識され始めてきた段階で、特に植民地政策研究のため、戦前の博覧会についての資料活用が増えている。ヨーロッパの大学では今まであまり研究されていなかった東アジアの博覧会についての研究者や、台湾や韓国では植民地時代の満州・台湾・朝鮮で開催された博覧会についての研究者の閲覧が続いている。また「最先端技術のショーケース」としての博覧会会場では、日本初登場というものも少なくなく、イベントとしてだけではなく民俗・歴史資料としての活用も見られる。又、明治時代の創業、周年を迎える企業から、自社製品の博覧会出品に関わる資料への問い合わせ等、産業史の語り部としての活用も増える傾向にある。

5. 結論

意識して集めなければ失われていくものを継続的に収集し、公開していく事で、新たな情報が集まり、多様な人々とのつながりも育み、通史としての博覧会資料が、オリジナルコンテンツとしての新たな価値を生んでいる。



紀元 2600 年日本万国博覧会



EXPO' 70 日本万国博覧会



EXPO' 90 国際花と緑の博覧会